

第五章 永遠の誕生日



一、佐渡の見える丘で 祖母

悲報に絶句

真夜中の電話が孫の事故を伝えてきた。息子が魚沼病院に電話を入れる。声かずり、受話器を持つ手が震えていた。既に孫は亡くなってしまったと言う、信じられない。佐渡発の船は朝迄無く、その時迄の数時間は実に長い長いものだった。何かと仕度をしながらも、どうしても喪服を持つ気になれなかった。

遺体安置室へ入った時、娘が白布を取りのけて、無言のまま茫然と絶ちつくしていた。こわばった表情の娘婿と、魂の抜けた様な孫娘とは、遺体の両側に言葉も無く寄り添っていた。胸の上にしつかりと組み合わされた白い冷たい手に触れた時、やっぱり死んでしまったのだという思いが心をうめた。

丁度一カ月前のお盆には、例年の様に花の手伝いに来ていたのに。毎年、お盆

とお正月と彼岸には必ず手伝いに来てくれていた。佐渡で生まれ、四歳迄は佐渡に居たあの子は、殊の外佐渡を愛した。佐渡の山にも海にもよく親しんでいた。私達を乗せてドライブもしてくれた。運転は慎重で、シートベルトをつける迄出発しないし、急いでいても制限速度をよく守っていたあの子が何故にと、とりとめのない思いに苛まれる。

一本の月見草

枕元に置かれた白いヘルメットの中のジャンパーは濡れていた。その濡れた胸元のあたりから、一本の月見草が出て来た。十五センチ位の細いたった一輪の花をつけた月見草が……。黄色い花びらは千切れていた。事故は深夜なのに、どうして河原の月見草が、ジャンパーの中に紛れ込んだのか。洋行が手折って胸に持っていたのか。又救出される時、河原に咲いていたのが紛れ込んだのか。どちらにしてもこの月見草は、孫から娘への最後の送り物であったにちがいない。私は月見草に頬摺した。孫の遺体と共に家に来たこの月見草、私はこれからも河原に

月見草を見る度に胸が痛むだろう。

あれから数カ月、五月十三日の洋行の誕生日。私は例年の様に誕生祝電を打つ。心の中で何時迄も生き続ける孫に、誕生祝いをしてやりたくて。私達にも必ず祝電や、電話をくれた洋行はもういない。いや、そうではない、きつと黄泉の世界から、何時もの穏やかな笑みで、いろいろと語り掛けているにちがいない。

あのこの好きだった白や、青紫色のてっせんの花を眺めていると、海星幼稚園の頃、私と一緒にいった楽しかった遠足が思われる。

永遠の休憩地

私もかつて、娘と双子であった長男を八十二日目で失い、逆縁の身を歎いたこともある。何の因果か娘も又私と同じく、いやそれ以上に、生涯、逆縁の辛さを背負って、何時も心の底に拭いきれない痛みを隠して生きていくのであろう。

我が子との二十一年間の数え切れない思い出を、大きな袋にぎっしりと詰め込み、その中から一つ一つ取り出しては、深い悲しみに涙する娘の顔を見ることは

忍び難い。又兄を失った孫娘のあの小さな胸の中を思うと、あまりの無念さに心が痛む。世間の多くの人が、こうした悲しみに堪えてきているだろう事を、初孫を失って今こそよく分かってきた。

墓地のこと等、考えてもいなかった新所帯の夫婦に、自分より先に子供のお墓を作らなければならないとは、あまりにも残酷である。

娘が私に、

「この場所は、夕日コンサートを鑑賞することが出来て、シンセサイザーに首っただけだった洋行はきつと喜んでくれるだろう。勿論、佐渡も見えるから……」
と言った子供を思う母親である娘の心情が、私には痛い程分かり、そっと目頭を押さえた。

太陽が西の空に沈む頃、真つ赤に燃えた夕日と限りなく続く青い海、そして地平線、さぞかし素晴らしい眺めであろう。

もうすぐ夕日コンサートの日も近づくと、音と光の織り成す幻想的な美しさの中

で、孫は安らかに眠ることが出来るだろう。小鉢の高台の墓地は、二十一歳の若さのまま眠るにふさわしく、波の彼方に佐渡も見える。

一、五月

鶯の鳴く小千谷

桜前線も掛け足で通り過ぎ、自然は春から初夏へと衣替えをし、風薫る季節となった。家々の庭には、芝桜、都忘れ、パンジー、サツキ等が美しさを競うように咲いている。

今年も又、いつものようにゴールデンウィークを迎えた。事故以来、毎日そう思ってしまうのだが、「去年の今頃、洋行は……」と考えてしまう。去年の五月三日は、洋行が帰って来てくれた日であった。今迄、単身赴任を続けてきた私の弟が、今度は家族一緒のブラジル生活が決まり、子供達がお別れに我が家に来てく

れたからである。あの日は、心持ち肌寒い日ではあったが、水原の瓢湖、昆虫の家と楽しい一時を過ごした。その日の夕食は、私が公民館で習ってきたばかりの豆腐バーグであった。食べ盛りの子供達はお皿をからっぽにしてくれたことを覚えていいる。二人の子供達が増え、夜遅く迄、笑い声の絶えなかった一日であった。

翌日の五月四日、せめてもう一日ゆっくりしていけばと思う私の気持ちをよそに、洋行は長岡へ帰っていった。多分、長岡で友人達との約束でもあったのだろう。高校時代からアパート生活を夢見ていた洋行にとって、大学生活はどんなに楽しかったことが。

六十三年のゴールデンウィークを思い出しながら、私達三人は、五月四日、あの身を切られるような悲しい事故現場へと出かけた。初夏とはいえ、ブラウス一枚でも暖かい程の一日であり、私と千鶴にとっては今年初めての現場であった。去年の暮れ、雪一色であった小千谷の山も、今は何処を見ても若草色に染まっていた。

早春の頃、主人が土の中から小さな頭をそつと出し、春に驚いているかのよう
な一本の土筆を摘み取ってきた。それをコップに入れて遺影の前に供えたのは、
もう二カ月前のことなのか……。

私達は白菊の花を供え、手を合わせた。無言で目を閉じている三人の心の中は、
無念の涙で濡れていた。どなたが供えてくれたのか、まだ新しいスプライトとお
菓子が……。洋行を思い、今だにこうして現場へ来て下さった友人を、私は嬉し
かった。私達家族と同じように友人達も又、何時迄も洋行の事を忘れないで欲し
いという思いが、心の何処かに潜んでいる。

現場にはまだはつきりと、車のわだちが残っていた。悲しみの思いで見つめて
いると、何処からか鶯の声が聞こえてきた。静かな小千谷の山あいに、川のせせ
らぎと美しい数羽の鶯の声が美しく溶け合っていた。心が洗われるような鳴き声
に耳を傾けていると、

「お母さん、あの鶯はお兄ちゃんじゃないの！」

と千鶴が私に話しかけた。

「そうだ！これは洋行の声よ、この鶯は洋行なのよ。私達が来て喜んでいるのだわ」

私は思わず唇を噛んだ。もう少して涙を落とすところであった。

一本の古びた木に這うように山藤が、薄紫色の花を付け、すぐ近くの小さな田んぼの中には、気持ちよさそうにおたまじゃくしが泳いでいた。こんな長閑な風景を見るのは十数年振りであった。佐渡の田舎で、おたまじゃくしや、めだかを捕まえて喜んでいた洋行の幼なかりし頃が頭の中を駆け巡る。このような美しい静かな山で、洋行は安らかに眠ることが出来るであろう。

二十二歳の誕生日

五月十三日は、洋行の誕生日であり、翌日の十四日は八回目の命日であった。

五月という月が近づくにつれ、ズッシリとのし掛かってきた胸のつかえを、取り除くことも出来ないまま、五月十三日となった。

十一日は祖母の誕生日であり、洋行は自分と二日違いの祖母の誕生日を忘れたことがなく、毎年、祖母に電話を掛けていた、祖母からも毎年、メロデイ入りや、押し花の祝電が届いていた。

洋行の遺品を整理していた時、昭和六十三年五月十三日の二十一歳を祝う祝電を見つけ、そこからは誕生日を祝うメロデイが鳴りだした。何ともいえない空しさか私を襲い、私は思わず耳を塞いだ。今年はや、洋行の声を聞くこともかなわぬ。去年は長岡で友人と誕生日を祝い合っていたのに……。

人の命の儚さ、運命のいたずらに、体中から溢れてくる無念の思いで、遺影の中の洋行を見詰めていた。祭壇の前に、祖母からの二十二歳を祝う祝電と、私達家族からのケーキが供えられていた。

祝電は、祖母も又私と同じく、洋行は生きているのだという実感の現れであった。電文は「今日は二十二歳のお誕生日だね、心の中の洋行、おめでとう」と書かれていた。

私達は、家族四人のつもりで、祭壇の前でケーキにナイフを入れた。誕生日おめでとうと掛かれたデコレーションケーキ、一番美味しそうなところを洋行に供えた。傍らで主人が、今は洋行の遺品となってしまったCDの中から、椎名恵の『愛は眠らない』を聴かせていた。

「このケーキうめえなあ！」と行っている洋行の声が聞こえたような気がした。

たとえ姿、形は無くとも、祖母をはじめ私達家族の心の中に、洋行は鮮やかに生き続けている。無くなったからといって、存在の無くなるような子ではないことを私達は信じていた。来年も又二十三歳の誕生日を家族四人で祝いたい。

ろうそくの炎とお香の中で、椎名恵の甘い曲が流れていた。

あとがき

二十一歳の若さでたった一つの生命を敵らしてしまった息子、爽やかな緑の五月に生まれた二十二歳の誕生日の日も過ぎた。

もうすぐ一周忌を迎えるというのに、未だに息子の死が信じられぬまま、心の動揺を制する事が出来ない日もある。

極限の悲しみに直面し、逆縁の身を歎き、悲しみのドン底を嫌という程味わった。そこからの立ち直りは至難の業であり、自分で立ち直る道を見つけ出す以外ない。

その様な中で、およそ物を書くという事に、或る種の抵抗さえ感じ、用件は電話で済ましていた私が、ただひたすら悲しみのドン底を夢中で書き留めてきた。

それは、息子の存在を活字として、永遠に残したいという気持ちと、私の心の整

理でもあった。その間には、涙でペンが動かぬ事も度々あった。これは鎮魂の書というものかも知れない。

交通死急増の世の中、私と同様、愛する人を失った心の痛手を背負ったひとたち、この本が少しでも力になれたならば幸いです。

愛する息子は逝った。しかし私の心の中で、母と子の深い絆は永遠のものであると確信している。純白の花に包まれた遺影の前で、甘酸っぱい微笑みを浮かべている息子の顔を見つめると、二十一年間の幸せだった日々が思われる。